

論 説

『戦陣訓』の遠い記憶

－ 捕虜大岡昇平と『ロビンソン・クルーソー』 －

中 原 章 雄

1. はじめに

「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」。1941年1月、日中戦争のさなかに公布された『戦陣訓』「本訓 その二」の「第八 名を惜しむ」の一節である。『戦陣訓』は、「皇国」の軍人の守るべき大則であるだけでなく、一般国民の日常に影響を及ぼすことになる「国民訓」でさえあった¹⁾。

大岡昇平は『俘虜記』において『戦陣訓』には言及せず、『俘虜記』についての対談などでは、後述するように、むしろその影響を否定するような口物を漏らしている。しかしながら、1971年11月に芸術院会員に推された大岡がそれを辞退したとき、彼は談話で「帝国陸軍軍人」でありながら捕虜になるという「汚点」をもった自分が「国家的榮譽」を受けるわけにはゆかないと語った。この反応は、「戦後文学」の旗手大岡昇平としてはむしろ当然の選択であったろう。けれども、みずからの過去を「汚点」という言葉で表現したとき、大岡の脳裏にひらめいたのは、『戦陣訓』の一節ではなかったろうか²⁾。

『俘虜記』のテキストは多義的である。そのうち最初に発表され、のちに「捉まるまで」と題されることになる短編には、エピグラフとして『歎異抄』から「わがこころのよくてこそさぬにはあらず」が引かれていた。ところが、大岡は『俘虜記』全体のエピグラフとしては、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の第3部 (*Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe*) の「序文」から、「或る監禁状態を別の監禁状態で表してもいいわけだ」という文を選んで添えた³⁾。

このエピグラフは以後、大岡の言う「二重の誤解」⁴⁾、すなわち英文の「誤訳」問題がからんで、一度『俘虜記』から外され、そののち復活するという複雑な経緯をたどっている。大岡の意図がどこまで成功したかは別として、捕虜収容所を描くことによって占領下の日本を諷刺するという方法は、『俘虜記』のほぼ全体を覆っているわけだから、『ロビンソン・クルーソー』

のエピグラフはかなりの重要性をもつはずである。

『俘虜記』についてのこれまでの批評家・研究者の読みは、当然、この二つのエピグラフのいずれかによって強く誘導されてきた。しかしながら、『俘虜記』のカギとなるのは、最初の短編「捉まるまで」の冒頭にある、「私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった」という文を以て他にはない⁵⁾。

この文は、一見、「捉まるまで」の経過をただ倒叙的に事実として表現したに過ぎないかのようである。だが、事実の記述が冒頭に置かれたのは、それが同時に、いや事実の記述である以上に、重い「告白」であったからこそであろう。この短いセンテンスのうちには、戦後日本の知識人大岡の倫理と帝国陸軍兵士大岡の倫理とがせめぎ合い、さらに小説家としての出発を目指す大岡の戦略と絡み合って、凝縮している。その事実を感得することなしに『俘虜記』の読みはありえないだろう。

大江健三郎は、大岡の死の直後に出版された彼の最後の評論集『昭和末』の「解題」で、大岡の「生涯の主題の中心にフィリピンがあった」と指摘し、それは、「回想の旧戦場フィリピンというのではなく、つねに現在のアジア問題としてのフィリピンである」と述べている⁶⁾。じっさい、大岡のアジア問題への眼差しにしろ、半世紀近くにわたる一人の文学者としての生き方にせよ、すべては彼がミンドロ島山中において「俘虜」となったこと、またその事実を述べた「捉まるまで」の冒頭の文に始まったのである。この小論では、複雑で奥行き深いテクストのすべてを論ずることはできない。以上の点がこれまでの『俘虜記』論には十分に組み込まれていないがゆえに、とりあえずそれを最初に確認しておきたかったのである。

2 『歎異抄』と『ロビンソン・クルーソー』の間で

「私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった」という文で始まった「捉まるまで」は、次のように続く。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四国の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきもなく、これを守るわが兵力は歩兵二個中隊、海岸線に沿った六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行うのみである。(7)

告白は一転して、大岡に特徴的な地理的記述と、米軍上陸までの日本軍の防御態勢の客観的な記述とに変わる。こうして、「名ばかりの警備駐屯」を行っていた歩兵2個中隊が、昭和19年12月15日に艦船60隻をもって上陸した米軍に圧倒され、40日間孤立無援のまま空しく山中に露営するうち、マラリアの蔓延によって全く戦闘能力を喪失し、やがて米軍の本格的な攻勢

の開始によって無残に四散することが述べられる。小説は、このような背景の下で、「私」は、あたかも他者のように、「スタンダールの文体」で描かれると評価されてきた。

露営中のこととして、主人公に影響を及ぼした「一人の仲間」のことが語られる。その男は、銃後で愚かな資本家の手先となるよりは、前線で兵士として戦うことにならざるを得ないほどの「夢」を抱いていた。「彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っていると判断し、『こんな戦場で死んじゃつまらない』と思ったという」のである。主人公と彼は「比島脱出の計画を立てた」。

我々は子供の時読んだ『ロビンソン・クルーソー』の細目を語り合い、土民から竹から火を起す方法を学んでおいた。(15)

こうした空想は、「周囲に濃くなって来た死の影に対する肉体の反作用」である荒唐無稽な喜劇として書かれているが、主人公の生存と、その合理化への布石でもあろう。

このあと、アメリカ兵を撃たないと決める、よく知られたエピソードが登場する。これは、かなり多くの批評家や研究者によって絶賛されてきた。たとえば、西川長夫は、「戦場をさまざま敗残兵の一つの行為、あるいは脳裏に刻まれた一つのイメージの意味」の追究として、「かつて日本文学でこれほど執拗な真実追求が行われたことはなかったと思います」とまで絶賛している⁷⁾。

このどこまでも明晰であり続け、己を欺くことを決して許さない激しい情熱のなかに、大岡がそれによって自己の知性を磨いたスタンダールやヴァレリーの面影を認めるのは、決して間違った読み方ではないでしょう。

このような賛辞が多数派である一方で、発表当時から、「一篇の眼目たるアメリカ兵を射撃しなかつただけの細密描写があまりに論理的に割りきれすぎていて、作者が力んでいるほど読者にはその感銘が伝わってこない」という平野謙のような批評も生まれた⁸⁾。

また磯田光一は、『大岡昇平集』収録の『俘虜記』に優れた「解説」を書いているが、それは、主人公が撃つか撃たないかに迷うエピソードをさりげなく、しかし完全に無視している点で独自性がある⁹⁾。磯田論文は、「収容所としての戦中・戦後」という題されていることから明らかなように、大岡が捕虜収容所を描くことによって占領下の日本を諷刺しようとした意図を強調し拡大解釈することに力点があり、したがって、『ロビンソン・クルーソー』からのエピソードを重視する立場である。

磯田は、捕虜たちがの「神の囚人としての人間社会アレゴリーの様相さえ持つにいたる」と

して、次のような引用をおこなっている。

やがて俘虜は急速に墮落し始めた。

戦争が終わると共に、レイテ第一收容所三千の俘虜の心からは、唯一の道徳的な棘は取り除かれた。彼等が敵中に生を貪っている間に、太平洋の各地で続々命を殞しつつある同胞に対するうしろめたさが、突然なくなった。死んだ者は運が悪く、我々は運がよかった、それだけの話だ、ということになった。

「監禁状態」は言うまでもなく戦後論壇の流行語であった。かつて持て囃された言葉は、今日ではそれだけ一種の阿呆らしさをもって響くが、この言葉をキーワードとして『俘虜記』を読んでゆくことは、今なおそれなりに有効であろう。

だが、磯田論文の最大の問題は、その冒頭の、「大岡昇平氏が『俘虜記』について語る口調には、なにか独特な自嘲にちかいひびきがある」という文にある。大岡は、1973年に横井元伍隊長がグアム島から帰還したとき書いた「グアム島の証人」で次のように書いた。

これらは、結局、「生きて虜囚のはずかしめを受けず」という『戦陣訓』から出ているのである。外国では戦争はゲームと考えられ、捕虜になるのはむしろ名誉だ、というのは作り話である。捕虜になるのはどこの国でもはずかしいことである。

国際協定を無視し、無益な多数の犠牲を強いた日本国家と日本軍を厳しく糾弾しつつも、同時に、捕虜になるはずかしさを明確に説く大岡にとって、その体験記が小説家としての成功に直結したという運命を語るのに、「自嘲にちかいひびき」があることは当然すぎるほど当然のことであろう。

一方、『俘虜記』の「監禁状態」は、主人公がそのなかにあつて、限られた許される範囲においてにせよ、抜け目なく戦争の情報を仕入れていることによって、一層その性格が曖昧になる。通訳としての大岡は、アメリカ語を操り、アメリカ兵たちと接し、アメリカの食べ物を食い、アメリカの新聞・雑誌を読む。彼は無人島で監禁状態にあつたロビンソン・クルーソーよりは、はるかに恵まれた状態にあつた。じっさい大岡は、戦後最初にアメリカナイズされる文学者の立場にあつたはずである。スタンダリアンである彼は、アメリカ文化を、たしかに批判的にではあるが、同時に創造的に摂取していったのである。そのことが、戦後文学者大岡を創ったことを忘れてはならないだろう。ロックフェラー財団が、大岡をアメリカに理解をもっている日本文学者として、第1回特別給費生に彼を選んだのは、大岡自身が認めるように、正しかったのである¹⁰⁾。

3 「告白」と「燻製にしん」

これまで見たように、『俘虜記』は、「私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった」という「告白」で始まり、俘虜となるまでの経過を語った小説である。しかしながら、作者にとって切実な告白を冒頭に据えた小説が、どのように受け取られるかについて、発表するまで大岡には見通しがたたなかったであろう。作者大岡が、四散した兵士たちのなかで、マラリヤに罹って自由を失い、そのことによって捕虜として生きながらえるというだけの主人公の物語には満足していなかったことは明らかである。

撃つか撃たないかの問題を扱った部分は、短編全体の約4分の1、10ページあまりものスペースを占めている。それは、「私」が「生涯の最後の時を人間の血で汚したくない」（28）という切実な思いから発したことになっている。だが、アメリカ兵の「顔の持つ一種の美に対する感嘆」を述べた箇所や、それに続く「緊張感」と「恐怖」などの「内部の感覚」を分析した箇所などは、それらがいかに見事な描写であるにしても、また、国家によって強制された「敵」を殺すことを放棄するという論理があるにしても、冒頭の簡潔な、しかし重い「告白」とのかかりでは、結果的には、「レッド・ヘリング」、猟犬を惑わすための臭い消し用燻製にしんとさえ読めるし、平野謙の批判も示唆するように、むしろ饒舌な感じさえしかなない。

ここで、この場面を除いて、主人公が捕虜になるまでの小説全体の流れを簡単に見てみよう。サンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する集団から病気のため取り残された彼は、水筒の水も捨てて、「なるべく身軽に身をこしらえ」辛うじて病軀を運んでゆく。ところが、孤立し追い詰められた彼は、やがて「末期の水」を求めてさまよい、結局、「水を飲まずに死なねばならぬことを納得する」に至る。これより以前に、一人取り残されたときの描写につきのような場面がある。

私は榎に似た大木の根元に身を横え、おもむろに腰の手榴弾をはずして傍へ置いた。今となっては、これが私の唯一の友であり、希望であった。その強烈な爆発力は私を苦痛なくあの世へ送ってくれるはずである。（24）

以後、「手榴弾」は20回くらいも言及されることに注目せねばならない。だが、結局、それは不発となって、主人公は「唯一の友」に裏切られたかっこうになる。こうして、読者もまた裏切られるのである。

このあと、主人公は銃による自殺にも失敗し、やがて、「眠ったのだろうか、それとも所謂人事不省に陥ったのだろうか、明らかでない」状態で、捕虜となる。

以上のように捕虜となるまでの主人公の行動をたどってみると、アメリカ兵に遭遇する場面

の重要性が明らかになるように思われる。「私はここまで上るのに力を使い果していた」(23),あるいは、「私は再び力を使い果し」(28)ながら、空しく逡巡を繰り返す主人公の足取りのなかで、この場面が「私」が、みずからの意志を示して、目撃したアメリカ兵を撃たないと決める、この場面がクライマックスとなるのである。

このエピソードは決してフィクションではあるまい。山中に取り残された大岡が現実遭遇した出来事であり、捕まるまでに経験した最も記述にあたいするドラマであったにちがいない。同時にこの個人的なドラマを、小説家大岡が「捉まるまで」の物語のなかに織り込もうとした周到さにはいくら注意しても、し過ぎることはない。

けれども、「捉まるまで」は、このエピソードをもひっくり返して、主人公が、「水を飲むか飲まないか」(25)、撃つか撃たないか、手榴弾を投げるか投げないか、と逡巡を重ねるハムレット的主人公の物語、しかし、「偶然」と「運命の皮肉」によって、結局、敵をも自分をも殺さずに終わる「ハムレット」の物語とさえ読める¹¹⁾。

同時に注目すべきは、「捉まるまで」には、主人公だけでなく、多くの戦友たちの生死もまた、随所に注意深く書き込まれている点である。

こうしたことを私はあとで私と同じ俘虜収容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の部下と共に一カ月ばかり山の中をさまよった揚句比島人に捕えられた。彼はその手に残っていた手榴弾を投げなかった。(18)

また、アメリカ兵を撃たないエピソードのあとにも、次のような記述がある。

「逃がしてやる」といった伍長も軍曹の一人も、後で俘虜収容所へ来た。彼等は叢林に潜って無事に脱出したが、二カ月山中を彷徨した拳銃、ゲリラに捉えられた。わたしは彼等は全部戦って死んだと信じていたが、事實は歩ける者は全部脱出していたのである。(39)

このように、『俘虜記』は最初の短編からすでに、主人公の生死だけでなく、ミンドロ島で「名ばかりの警備駐屯を行っていた」弱兵、歩兵2ケ中隊という集団の運命の物語にもなっている。死者の死にざまはさまざまだが、生存者は、「手に残っていた手榴弾を投げず」、「全部戦って死んだと信じ」られていたが、「脱出していた」というように、ほぼ同じパターンで生きながらえたことが明らかにされる。戦友たちの生存に言及するとき、語り手である「私」は、自分と同じように、「皇軍」のほかの兵士たちもまた、『戦陣訓』に忠実でなかったことを確認するかのようである。生存者についての上の二つの引用は、ともに「私」の傍白のように、括弧で括られている。だが、そのゆえにこそ、テキストの解読に見逃しえない部分である。

4 よみがえる『戦陣訓』

1971年11月、大岡昇平は芸術院会員を辞退する。

フィリピンで捕虜になったことが恥ずかしくて芸術院会員などという国家的榮譽はどうしても受けられません。とにかく天皇陛下の前には出られません。一般の人は捕虜になることをそれほど恥ずかしいとは思わないでしょうが、帝国陸軍軍人であった私の気持ちとしてはどうしてもダメなんです（『読売新聞』1971年11月30日、傍点引用者）

さきの大戦で、私は捕虜になるという汚点をもっている。そういう人間が、国の名誉ある会員になるわけにはいかない。私の場合、フィリピン・ミンダナオ島で病気のため動けなくなって捕らえられたのだが、戦時中の、その時点でどんな理由があっても、捕虜になることは許されていない。そういう汚点ある人間が、陛下の前に出ることは、恥ずかしくてたえられないことだ（『毎日新聞』同上）

当時の新聞に報道された大岡の談話は、若干の違いはあるが、太平洋戦争で「汚点」に自分を追いやった国家が、その体験を記すことによって小説家としての地位を築いた自分に、四半世紀後になって「国家的榮譽」を与えようとする矛盾の痛烈な批判になっている点で一致している。

同時に、「恥ずかしくて天皇陛下の前には出られない」という、戦後文学者として一見韜晦したような表現は、その「榮譽」が彼にとって「天皇陛下万歳」を叫んで死んでいった戦友たちの思い出に連なることを考えれば、むしろ率直な言葉でもあろう。

「はじめに」で触れたように、辞退に際して、みずからの過去を「汚点」という言葉で表現したとき、大岡の脳裏を、『戦陣訓』の一節がかすめなかったであろうか。

『俘虜記』では『戦陣訓』に言及しなかった大岡も、この小説をめぐる対談やインタビューでは、何度かそれについて語っている。

1974年8月に秋山駿、菅野昭正、中野孝次を聞き手として行われ、『わが文学生活』としてまとめられたインタビューでは『戦陣訓』について、「あれは支那事変で現地地でたらめをやるので東条が出したもので、近歩一は誇り高き親衛隊だから、俺たちには関係ねえんだというわけ。出先部隊でも反撥したのが随分あったらしいですよ。軍人勅諭でたくさんだということね。（中略）でも主な条項は新聞に発表されたからね、ことに『生きて虜囚の恥ずかしめを受けず』なんていうのは、喧伝された項目だからみんな知ってた。近衛でもとくにあんなものはいらぬ、とはいわなかった」と語っている¹²⁾。

また、1984年の埴谷雄高との、二人が共に生きてきた時代を回顧しての対談『二つの同時代

史』では、捕虜収容所での生活が話題になったときに埴谷の方から、「そのとき陸軍の『虜囚の恥しめを受けず』とかいうものは生きていたの？」と尋ねている。もちろんこれは尋ねにくい質問である。大岡にとって意地悪く響きかねない質問である。戦中派で獄中体験があり、親友である埴谷だからこそ尋ねうる質問であろう。大岡はつぎのように答えている。「全然ない。そんなものはありゃしない。第一、東部第二部隊、近衛一連隊だけど『戦陣訓』は教えなかった（笑）。（中略）これは近衛の連隊長の判断だった。『戦陣訓』は東条の作ったもんでね。中国派遣軍の風紀が乱れたから作ったもんだから、近衛には関係ないっていうんだよ」¹³⁾

要するに、所属部隊では「教えなかった」が、「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」の項目は新聞などで知っていたというのである。大岡の言葉を疑う必要はまったくない。だが、「教えなかった」こと自体は事実としても、また「近衛」連隊がいかにか誇り高くとも、帝国陸軍の兵士の基本的な言動にかかわる問題が、一連隊長の判断によって左右されるものでないことは、戦後の読者よりもはるかに良く大岡が心得ていたはずである。こうした『戦陣訓』にかかわる問答に、デリケートな問題を尋ねる方には遠慮があり、答える方にもこだわりがある。そのことは、『俘虜記』という小説の作者と読者のかかわりにも見られるであろう。その点をさらに考えるべきであるが、紙数も時間もなくなってきた。とりあえず結論を急がなければならない。

5. おわりに 軍国少年の読む『俘虜記』

1949年4月、単行本『俘虜記』が出版されたとき、河上徹太郎は次のような書評を書いている。

この敗戦記は、凡百の類書がただ誇張した報告と、卑屈自嘲と、後からくつつけた戦争呪詛で綴られてゐるに対し、生きた人格が、如何なる瞬間にもひるまずに、堂々と戦時戦後の修羅場を闊歩しているのが窺へる。それは、この反口マンテイクな文章にも関らず、「高貴な魂」とでもいった、大時代な言葉で形容したくなる、高揚されたヒューマニティの一状態であり、さういふものの寂寥に悩む敗戦後の日本だけに、一層懐かしい気がする。

友人でもある評論家のこの賛辞は、全面的に大岡を喜ばせたであろうか。「敗戦記」のユニークな価値はその通りであろう。だが、「高貴な魂」という美しい言葉は彼を満足させたであろうか。

いま、世紀末の怪奇に満ちた平和な日本で、戦中戦後を生きながらえた一人の老教員として、わたしは『俘虜記』の文学的達成にあらためて感動する。それは、戦後文学の傑作であると

もに、戦争文学の稀な傑作でもあることは疑いない。この小説を読むと、それが、おまえもまた、戦後日本の捕虜収容所的な、のんきで墮落した「監禁状態」を生きながらえた一人なのだという、確認と批判を迫ってくるだけでも、それは傑作の名に恥じない。

しかしながら、戦中戦後を生きながらえた老教員は、『俘虜記』を読み返しながら、同時に、何度も心のどこかで、かすかなもう一つの声があるのを聞いたことを書き留めておこう。それは、太平洋戦争中の軍国少年の声であるらしい。

開戦直後に国民学校に入学した少年は、毎年3月10日の陸軍記念日には、あの教育勅語の9倍という、恐ろしく長ったらしい軍人勅諭が読まれるのを直立不動のまま聴くことを強いられた、そのあと奉天大会戦での日本軍の大勝利についての講話を拝聴するのであった（5月27日の海軍記念日には、日本海海戦について同じことが行われる）。昭和19年4月から3年生になった軍国少年は、毎朝、教室で、「一つ、軍人は忠節を尽くすを本文とすべし、云々」と、『軍人勅諭』の一節である、軍人の守るべき忠節、礼儀、武勇、信義、質素の五か条を、元軍人の教員によって暗唱させられていた。軍国少年はまた、比島決戦が怒号されたころ、初めて神風特攻隊「敷島隊」の戦果（それは『レイテ戦記』第10章で大岡が詳しく再現している戦いである）が報じられた日に、「お前たち」も軍神に続くべきことを訓話されたのち、2時間にわたって晩秋の朝の冷えきった教室で英霊に正座して黙祷することを強いられた。昭和20年4月、アメリカ軍が硫黄島を攻略し沖縄に上陸したころ、少年は疎開先の国民学校でこれもファナティックな校長から、「お前たち」も来るべき本土決戦の際は潔く自決する覚悟を養うよう訓示され続けていた。その、かつての軍国少年の声はささやく、結局のところ、皇軍兵士大岡昇平の戦いは、やっぱりぶざまなものであった、と。

けれども、老教員は知っている、そのぶざまな兵士が、戦後みずからの戦いを、どれほど繰り返し繰り返し反芻させられたかを。それは芸術院問題だけではなかった。1973年、グアム島から横井元伍長が生還する。このとき、大岡は、「二十八年という気の遠くなるような長い年月の間、たった一人で（中略）苛酷な条件に耐えて、自分の選んだ生き方を続けてきた横井さんの気力に、尊敬の念を禁じ得ない」と述べ、（すでに引用したように）「これらは結局、『生きて虜囚のはずかしめを受けず』という『戦陣訓』から出ているのである」と書いた。そのころ、フィリピンのルバング島では、二人の日本兵がジャングルから現れて現地国家警察軍と銃撃を交え、一人が射殺される。大岡は、このとき、「ルバングの兵士たち」という文章で次のように書いている。

われわれは何という悲しい国に生きているのだろう、という思いにかられる。日本はこのような兵士を、西南太平洋の島々に残したまま、降伏した。それを日本に連れ帰り、日常生活に復帰させるのは、国の義務であるはずなのに、当局はそれを怠り、結局二十八年経って食糧を

あさりに人里に出て来て発見され、現地の警察に射殺されたのである。

大岡にとって衝撃的であったと思われるのは、のちになって、このとき住民に射殺された兵士、すなわち小塚元一等兵は、彼自身と「中隊は異なるが、昭和19年3月から9月まで、同じ東京の近衛連隊で教育され」、「同じ第一玉津丸で7月15日マニラに着き、ほぼ同じ時期に、ミンドロ島とルバング島の任地に着いた」という経歴の持ち主であったと判明したことである。敗戦後の経済復興の余沢に包まれて生きる元捕虜である自分と、かつてほとんど同じ運命をたどっていた戦友が、「二八年という気の遠くなるような長い年月」をジャングルでいまや繁栄を謳歌する国家から見捨てられたまま孤独な戦いを続けた末に、射殺されてしまったのである。その苛酷極まりない生を支配し続けたのが、『戦陣訓』であったのだ。同じように長い歳月を孤島で生きたとはいえ、小塚元一等兵に比べれば、自らのきまぐれが原因であり、救出され生還しえた『ロビンソン』の主人公などはラッキー・ロビンソンとでも呼ばれるべきだろう。

そのルバング島で、2年後に、今度は、小野田元少尉が救出され、横井伍長生還のとき以上の騒ぎになる。死んだ戦友たちのための壮大な鎮魂の碑『レイテ戦記』はまだ完結しない。こうした事件のたびに、元捕虜大岡は無数のインタビューや談話の強要にさらされ、戦後生まれの能天気なインタビュアーたちは、元捕虜元「神経さん」の神経を逆なでするような、無邪気・無知・無神経な質問を浴びせたはずである。

大岡昇平は、最後まで何と見事に戦ったことが。小説家大岡に「誠実」という言葉を使うなら、それは、撃つか撃たないかの心理を犀利に分析する彼ではなくて、つぎつぎと戦後社会に現れる現象にたいして、つねに元捕虜として立ち向かった彼の姿勢に使われるべきである。

大岡の『レイテ戦記』にフィリピン人の視点が欠落していたという、最近よくなされる批判はその通りだろう。この戦記で何度か大岡が使っている「よく戦った兵士」という言葉が危険であるという指摘もまた、おそらく正しい。だが、これらの批判が、同時に、長い戦後を生きた元捕虜大岡の心の闇への考慮を欠くかぎり、その正義の言説は、日本の言論人としては、重みをもたない批判にとどまるだろう。その軽さは、フィリピン人の視点への配慮も、結局は、言ってみるだけに過ぎないことを立証するだろう。

『俘虜記』に戻って言えば、それは告白で始まりながら、すべての真実を告白してはいなかった。戦友の亡霊につきまとわれ続けた大岡の生涯は、告白し残したものに最後まで追いかけられた生であった。『ロビンソン・クルーソー』のエピグラフで占領下日本を諷刺しようとした時、大岡自身がその日本に身を置きつつ『俘虜記』の作家としてデビューした事実の皮肉な重みに十分気がついていなかったのだ。こうして、とっくに訣別した筈の『戦陣訓』の隠微で執拗な逆襲が始まる。だが、もう一度確認しておこう、皇軍の兵士大岡の戦いは、ぶざまであった、だが、そのぶざまな戦いが、戦後において小説家大岡の見事な戦いを生んだのだと¹⁴⁾。

注

- 1) 『解説「戦陣訓」』（東京日日新聞社・大阪毎日新聞社、1941年）の冒頭には、陸軍大臣東條英機による「陸訓第一号」として、「本書を戦陣道徳昂揚ノ資ニ供スベシ」が引用され、また、主幹高田元三郎による「序」に、「『戦陣訓』の大文章は、帝国軍人の守るべき大則を明示したものであるのみならず、一般国民にとっても、行くべき大道を示した『国民訓』であると思います」とある。『戦陣訓』の「本訓 其の一」は、「第一 皇国」、「第二 皇軍」となっている。
- 2) 大岡の芸術院会員辞退については、本稿第2章参照。
- 3) 「『俘虜記』の原稿写真（『新潮日本文学アルバム67 大岡昇平』[1995年] 38-9ページ）では、『歎異抄』からのエピグラフは「ころさぬにはあらず」に続く、「害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあべし」までが引用されていたことが分かる。
大岡は、「二重の誤解」（次注参照）のなかで、「文学史では『ロビンソン』は近代小説の祖とされているが、デフォー自身は、これが当時はやりのこさえものの冒険小説ではなく、実際にあった話だ、と主張していた」と解説したあとで、第2部、第3部は今日では「誰も読む者はいない」とコメントしつつ、「第3部の序文はロビンソン・クルーソー自身が書いたことになっているのだからひどいものである」と、小説家であっただけでなく、優れた小説の読み手でもあったはずの大岡らしくない感想をもらしている。
- 4) 「二重の誤解」（大岡昇平『文学の可能性』作品社、1980年、258-62ページ）によれば、『ロビンソン・クルーソー』からのエピグラフの削除と復活にまつわる事情は以下のようにかなり込み入っている。『俘虜記』をまとめていた1952年の頃、アルベール・カミュの『ペスト』が邦訳され、そのエピグラフにダニエル・デフォーの句として「或る監禁状態を別の監禁状態で現わすことは、実際に存在するものを、存在しないものによって現わすと同じくらい理にかなったことである」とあったのを、大岡は「自分に都合のいいところを取った」のが最初であったという。ところが、8年後の1959年になって、「同じくらい理にかなっている、というのは、実はそれほど理にかなっていない、という否定的な意味」を「誤訳」したのではないかという示唆があり、英語の原文を見ていなかったこともあって、大岡は「八年間の誤解」という小文を新聞に発表し、文庫版からエピグラフを削除した。ところが、その後、デフォーの原文を確認した結果、「前後の文脈からいって、肯定的なのは明瞭だと思う」と判断して復活させることにしたという。なおデフォーの英文該当箇所はつぎのようである。“All these reflections are just history of a state of forced confinement, which in my real history is represented by a confined retreat in an island; and it is as reasonable to represent one kind of imprisonment by another, as it is to represent anything that really exists by that which exists not.” *Serious Reflections*, ed. G.A. Aitken (London: J.M.Dent, 1974) xii .
- 5) 『俘虜記』のテキストは、現在最も入手しやすい新潮文庫版により、以下、引用において括弧内にこの版のページを記す。中央公論社版『大岡昇平全集』を参照した。
- 6) 『昭和末』岩波書店、1989年、481ページ。大江は、「解題」を「裕仁天皇重篤の報道を聞いてまず思うのは、『おいたわしい』ということです」という大岡の談話についての詳細な分析から始めている。
- 7) 西川長夫『日本の戦後小説 - 廃墟の光』岩波書店、1988年、197ページ。なお、西川の大岡論としてとりわけ優れているのは、『大岡昇平全集 第1巻』の「解説」として書かれた、「大岡昇平以前の大岡昇平」である。
- 8) 『文芸時評』『群像日本の作家 19 大岡昇平』小学館、1992年、86ページ。

- 9) 磯田の「収容所としての戦中・戦後」からの引用は、「解説」をまとめた『大岡昇平の世界』(岩波書店, 1989年)による。同書, 11ページ。
- 10) 『大岡昇平・埴谷雄高 二つの同時代史』岩波書店, 1984年, 302ページ参照。大岡には二つのアメリカ旅行記があるが, 1973年出版の『萌野』は, ニューヨークでの息子夫婦の最初の子の誕生という, ドメスティックな問題を描きながら, 戦後文学者の見た70年代初頭のアメリカを闊達な筆致で描いたユニークな紀行になっている。大岡特有の早とちりや, 知ったかぶりも楽しい。
- 11) 「手榴弾」の不発については, 46-7ページ参照。
- 12) 『わが文学生活』127ページ。
- 13) 『二つの同時代史』215ページ。
- 14) この稿をほとんど書き終えようとしてから, 今朝(1999年12月21日)の新聞を見たら, 1941年12月8日の小型潜水艇で真珠湾奇襲攻撃に参加し座礁して「捕虜第1号」となった, 酒巻和男氏の死が報じられていた。酒巻氏は, 1946年に生還するまで, 戦死した他の小型潜水艇員とともに, 太平洋戦争の「軍神第1号」でもあったはずである。

なお, 『戦陣訓』と関連して, 「玉砕」戦法については, 最近, 河野仁「玉砕の思想と白兵突撃」(『近代日本文化論10 戦争と軍隊』岩波書店, 1999年)があり, 示唆に富む。ただ, 日本軍は米軍にとって「最も気心の知れない敵(the most alien enemy)」というベネディクト『菊と刀』の一節をエピグラフとするこの論文は, 米軍と対置して日本軍の特異性を徹底して強調するが, ローマ帝国以来の軍事思想の伝統をもつヨーロッパでは事情は多少異なろうし, しかも現代においてさえ, 国家の存亡を賭けた戦争はつねに「聖戦」となる危険をはらんでいるのだから。

[後記]

本稿を書いているあいだに, 西川さんから『フランス解体?』(人文書院)を頂いた。この新著は, 著者にとってもおびたしい著書のうちで, 明らかに特別なものであろう。彼の60年代終わりからの知的軌跡, あるいは2学部2研究所にまたがる立命館での目覚ましすぎるほどの活躍が, がかなり迎れるように案配されている気配があるからである。言い換えれば, 西川教授が, 居心地の悪さを絶えずこちながら, (『日本の戦後小説』の「あとがき」参照)いかにつねに先端的な問題を追いかけて, いか疾駆してきたかが分かる論集なのである。最先端の問題が手際よく料理されていると同時に, 30年前の懐かしい5月革命のルポルタージュが収録されているのだから(懐かしいと言えば, 「解体」という言葉も懐し過ぎて, 若い読者にはメッセージが届くだろうか。もっとも, 当時私たちの学部は, 対立する関西最強の二つの学生組織から絶えず大衆団交を強要され, まさに「解体」寸前で無力な足掻きを繰り返す日々だったのだが)。若かった西川助教授の颯爽とした留学生生活とラディカルな立場を知るにはまたとない貴重な文献だけに, 短い書評風の私的な感想を, この記念論集の拙稿のあとに是非付けさせてもらうつもりだったが, 締め切りが来て時間がなくなってしまった。

(Akio Nakahara, 本学文学部教授)